

杏手鳥孤城落月 一本刀土俵入
西郷と豚姫 頼朝の死
藤十郎の恋 巷談宵宮雨
小栗栖の長兵衛

名作新選全集 二十五

権三と助十
お国と五平
息子
同志の人々

昭和
東京創元社

全集伎舞歌名作

第25卷 新歌舞伎集二

昭和四十六年九月九日 発行

監修者

戸板康二
利倉幸一
河竹登志夫
郡司正勝
山本二郎

発行所

株式会社
代表者 秋山孝男
東京創元社

(總)東京都新宿区新小川町一十六
電話(〇三)二六八―八三三一
振替 東京 一五 六五

印刷・株式会社 金羊社
製本・株式会社 鈴木製本所
用紙・株式会社 富士川洋紙店
写真版・(株)興陽社、(株)方英社

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

目次 (名作歌舞伎全集第二十五卷 新歌舞伎集二)

杳手鳥孤城落月 坪内逍遙…………… (装置図) 高根宏浩…………… 三

西郷と豚姫 池田大伍…………… (装置図) 釘町久磨次…………… 五

藤十郎の恋 菊池 寛…………… (装置図) 釘町久磨次…………… 八

小栗栖の長兵衛 岡本綺堂…………… (装置図) 八木恵一…………… 一〇

権三と助十 岡本綺堂…………… (装置図) 釘町久磨次…………… 一三

お国と五平 谷崎潤一郎…………… (装置図) 萩原勝美…………… 一五

息子 小山内薫…………… (装置図) 田中 良…………… 一七

同志の人々どうしひとびと 山本有三……………(装置図 田中 良)……………二〇九

一本刀土俵入いっほんがたなどひょういり 長谷川伸……………(装置図 高根宏造)……………二一七

頼朝の死よりとも 真山青果……………(装置図 萩原勝美)……………二七五

巷談宵宮雨こうだんよみやのあめ 宇野信夫……………(装置図 高根宏造)……………三〇五

解 説

利倉幸一

写真と資料提供―演劇出版社、大谷図書館
宇野信夫、岡本経一、利倉幸一、吉田千秋

坪内逍遙

沓手鳥孤城落月

ほととぎすこじよりのらくげつ



大正十四年四月十日
 東京
 本邦
 日本
 東京
 大正十四年四月十日

一 昔曾懐かむ 五念 八念 十念
 二 昔曾懐かむ 五念 八念 十念
 三 昔曾懐かむ 五念 八念 十念
 四 昔曾懐かむ 五念 八念 十念
 五 昔曾懐かむ 五念 八念 十念
 六 昔曾懐かむ 五念 八念 十念
 七 昔曾懐かむ 五念 八念 十念
 八 昔曾懐かむ 五念 八念 十念
 九 昔曾懐かむ 五念 八念 十念
 十 昔曾懐かむ 五念 八念 十念

東京

大正十四年四月十日

杵手鳥孤城落月

利 倉 幸 一

新かぶきの第一旗手としての坪内逍遙の作品は、第二十卷に『桐一葉』を入れたが、追補のこの巻には、この『杵手鳥孤城落月』を収めることにした。逍遙の史劇として妥当なる選択であろう。殊に『桐一葉』と、時代と人物とに聯楔のある大阪陣を舞台にした史劇である。『桐一葉』の続篇であり、いわゆる二部作でもある。当然な収録と言えよう。

明治三十年九月「新小説」掲載。三幕六場。

その初演は意外にも大阪が先んじている。明治三十八年五月の角座。

主なる配役は淀君と且元が片岡我当（後の十一世仁左衛門）、秀頼と常磐木が片岡我童（後の十二世仁左衛門）、家康が嵐橋三郎、本多佐渡守と大藏卿が黒谷市蔵（後の中村

嘉七）、正栄尼と大住与左衛門が中村高福、饗庭局が中村歌昇、井伊掃部頭が実川延三郎、片桐出雲守が尾上多見蔵であった。

この上演はかなりに好評であり、特に十一世仁左衛門の且元は後に生涯の当り役になっているように大いに拍手されたのであるが、大阪という環境を考えると、果して逍遙の意図した「史劇」がどのように効果づけられたか、いささか疑いを残す。その櫛庫（きくら）の場にちよぼ（ちよぼ）を用いたようなさかしらや、仁左衛門が淀君をも演っているのが無理ではなかったかと推されるように、若干逍遙の意図とは喰いちがったものがあつたようだが、その翌年三月、東京座での上演はそれらの欠如を払拭して、殆んど遺憾のない演出であつた。

それには芝翫（五世歌右衛門）の淀君と我当の片桐且元が軸となつて佳演を見せたからである。歌右衛門の淀君は後年「淀君集」と名づける得意の舞台を選んで誇示するそもその端緒となつたほどの名舞台であつた。しかも、今に於いて逍遙史劇の淀君は歌右衛門を凌駕する舞台は生れていない。新かぶきの歴史的なる上演であつたと言える。

その梗概——

〔序幕〕元和元年初夏、難攻不落と言われた大阪城の命

運も既に尽きようとしていた。誰の胸にも絶望感が漂っていたが、独り淀君だけは抵抗の気力を昂ぶらせていた。かねてから徳川と内通していた小車の局が奥女中常磐木と謀って、千姫を城外へ逃がそうとしたが、見つけられて、小車を斬った淀君は周囲の者をはげしく叱った。共謀者を白状せよと責められた常磐木は淀君をのしり乍ら舌を噛んで自害した。淀君の怒りは募る一方、かけつけた大野修理が最後の評定を天守でとすめめた。

〔第二幕〕 片桐且元は重病を押して、茶臼山に家康をたずねて、主家の安泰を請うた。その苦衷を察した家康は、秀頼・淀君の助命を約束した。そして、家康は二人を迎えるために且元に駕を与えた。

しかし、この時分、城中では徳川方の間者、庖丁方の大住与左衛門が大台所に火を放ったのでたちまち混乱。その騒ぎの中を千姫は城外へ逃れた。

火は精庫にまで近寄ろうとしていた。人質のつもりだった千姫の逃亡を知った淀君の怒りは頂点に達し、半ば狂乱に近かった。これを見た秀頼はその命運の絶えようとするのを知ると、今は狂ったかのような母の哀れな姿が見ていられなくなつて、自らの手で刺そうとした。周りの者に止められた秀頼は、母のためには忍ばねばと、開城を決意するのだった。

〔第三幕〕 伴出雲守に助けられて、駕で本丸桜門前まで馳けつけた且元も、病気には勝てなかった。血を吐き気を失った且元の耳に轟いたのは天守の落ちる火の手と大砲の響き。出雲守が城中へ飛んだが、既に秀頼母子の生害の報せが直ぐにもたらされた。万事休す。馬に乗って家康が来た時、且元は眼を閉じる寸前であった。

坪内逍遙の略伝は第二十巻にある。

事前の事情

第一幕

大阪城内の奥殿

第二幕

第一場

茶臼山東軍本営

第二場

二の丸内の乱戦

第三場

城内山里糶庫階上

第三幕

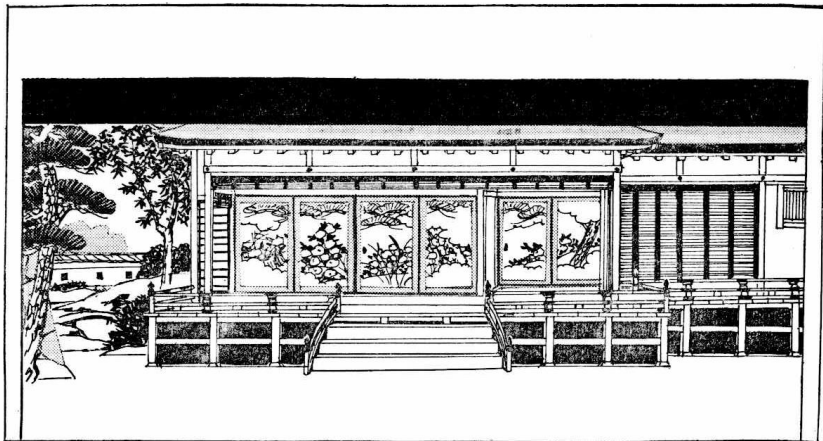
第一場

本丸の高石垣際

第二場

本丸桜門前

寄手の凱歌遠方に消えて、燃えのこる兵火五月の空をこがし、赤色の七日月血汐をあびたる利鎌のごとく天守台の西に落ちなんとす。南山不落の大阪城も餘命こよひを限りとぞ見えし。後藤、木村、薄田をはじめとして頼みきつたる勇将は先きだつて討死し、渡辺内蔵介も重傷を負ひ、夜に入つては天王寺口も悉く敗れ潰え、軍師真田左衛門佐幸村も命を落し、残る四天王の随一人、長曾我部盛親父子、また大野修理亮治長の父、入道々軒、其の他二三の股肱のやからも、如何さまに思ふ所ありてか、遽かに敗軍の途中より逐電せり。さるほどに敗報櫛の齒を引くが如く、秀頼卿も今は是れまでと思されければ、徐に千疊敷に入らせたまひて、既に御生害の御覚悟ありけるを、毛利勝永、速水守久ら「夜中には敵も攻め詰め候ふまじ、夜明けて後に御覚悟あつてもおそかるまじ」と修理亮もるとも押しとよめまゐらせければ、君も一たびは思ひとよませたまふ。かくて守久らはそれぞれ持口を割り渡して外郭を固めさせつゝ、尚ほ隅なく指図して見苦しき物どもを取りをさめ焼きすてなんどする程に、未練臆病のともがらは、竊かに夜に乘じて抜けいで思ひ／＼に落ち失す。子の時過ぐる程までは城内騒然



大阪城内の奥殿の場

第一幕

大阪城内の奥殿

と濫りがはしかりしが、更けゆくまゝに漸う打ちしめりゆく奥殿物さびしく、女わらべ寄りこぞりて泣き惑ふさま哀れなり。時に元和元年五月七日の夜、豊臣家滅亡の前夜なり。

正面は左右へ廻して高欄附、広縁の奥御殿、正面には階段、尚は上手奥へ退つて縁側つゞきの別棟。下手奥にも別棟、築山、泉水と共に遠く見え、前の方にも植込。上手々は稍々高き網代垣。殿上には、燭台が只二基、上手と下手とに不規則に置いてあるのみで、人影は見えない。雨車。ト向うより腹巻した武士二人宛にて大将分らしい手負の武士二人を各々楯に載せて担ぎ荷ひつゝ出て来り、上手網代垣の後へ通り抜けて入る。トすぐ後から婢らしき年配の女と同じく若い女とが甲斐々々しく襷がけて、白布、蒔絵の手桶などを携へ、急ぎ足にて下手より出で来り、続いて上手へ入る。ト遠寺の鐘。やがて殿上の下手奥から縁側つたひに侍女初翬、紅翬、錦木、花野、しほくと、何れも泣きながら出て来て、不規則に居並ぶ。

初 翬 ナア申し、紅翬どの、かうして互ひに話しあふも
今宵限りでござんせうぞえ。かうなることゝ知つたな
ら、此正月の宿下りに流行風ひいたを幸ひ、養生せいで
あのまゝに、母さんの傍にあつらうもの、情けないこと
になつたわいなア。

紅 翬 お前はまだしもお正月に、お宿下りをさしやんし
たゆゑ、諦めも附けば附く。此七月を楽しみに空待した
妾の心、推量して下さい。

錦 木 そりや妾とても同じこと、宿世ぢやと断念めて、
死ぬる覚悟はしてゐれど、成らうことなら、たつた一
目、母さんの顔が見て死にたうござんす。

花 野 それもなア、如何あつても、所詮助からぬと思ふ
にこそ、御台さまにおすがり申し、お命乞ひをなさるれ
ば、上さまはじめ我々も、きつと命は助かるげな。最前
も大蔵さまや皆さまが、御台さまを関東の、御陣にお送
りなさるゝやう、御前にお勧めなされたれど……

錦 木 さては関東に内通して、姫を逃す心でがな、千姫
は一寸も、こゝ離すことならぬ〜とお腹だち。あられ
もないお疑ひ。

花 野 それといふのも段々と、日ましに暮る御不例ゆ
ゑ。

紅 翬 其の御不例の源は、淀さまのお讒言で、お果て

なされし関白さまのお怨み。

初 翬 真に怖しいもので……（ト皆ぞつとした思入）。

皆 ござりますすなア。

錦 木 とはいへ、此方は知らぬこと、怨霊さまも聞え
ぬ。どうでも明日は死ぬのかいなう。

初 翬 紅翬どの。

紅 翬 初翬どの。

花 野 錦木どの。

錦 木 花野どの。

ト四人互ひに顔を見あはせ、手を取りあひて、一斉に声
をたてゝ、はしたなく泣き伏す。此時奥女中小車の局、
雪洞を手にもち、奥より立ちいで

小車局 又してもはしたない。常とはちがひ、お座所が近
うござりますするぞよ。見苦しい。たしなみませうぞ。

皆 ハイ〜、御免なされて下さりませ。

小車局 明日のお心まうけで、幾人あつても手は足らぬ。

うっかりしてゐる時かいの。そもじたちもお手つだひ。

さゝ、残らず揃うて、奥へ〜。

ト棄せりふにて皆々を追立てる。初翬、紅翬、錦木、花
野、涙をふき〜会釈して、しほ〜と奥へ入る。小車
独り残り、皆々を見送り、やがて四辺へ思入ありて、階
段の降り口にて

真田、木村を初めとして、諸将大かたは討死なし、今宵に縮まる当家の運命。恩顧譜代の歴々さへ、秋をまつ知る燕子の、倒れかゝりし古軒端に、巢まで残してちりぢりばら／＼。只一代の栄耀の花、散つて残るは身一つの、落目も当家の自業自得。かうあらうと思つたゆゑ、関東へ心を通じ、本多正信どのゝ内意をうけ、何卒首尾よう千姫さまを誘ひだしまゐらせんと、此正月の始めよりお婢女に住みこみし、本多家の奥女中、常磐木と心を合せ、日毎に油断を窺へども、淀さまの鶺鴒の目鷹の目、けふまでは空に過したれど、もはや今宵は延ばされぬ。(ト思入) 常磐木を呼びだし、今の間に手筈をせうか……イヤ／＼それよりもまづ姫君さまを。幸ひ奥は取込最中……今の間に隙を見合せ……さうぢや。

ト上手の奥へ行かうとする。此以前下手築山植込かげより、婢女お松、実は本多佐渡守が家臣某の妻常磐木、赤合羽、竹の子笠にて面をかくし、あたりへこなしあつて忍びいで、此時すかし見て、つか／＼と階段のほとりへ来て

常磐木 小車さま。

小車局 ヤ、常磐木どのか。

常磐木 アモシ。

ト常磐木四辺へこなし、階段の下に居る。小車は階子の

降り口に坐る。常磐木声を竊めて

常磐木 小車どの、もはや今宵は外されませぬぞ。

小車局 今も今とて其の事。未練の歎きに上下とも、眼くらむ油断ぞ幸ひ……きつと首尾してお姫さまを、こゝまで程は難なけれど……番所々々の目をかすめ、郭をぬける手段は何と。

常磐木 オ、其のお気づかひは御無用々々々。妾の手にさへ受けとらば、お姫さまを婢にしたて、御本丸をぬける工夫は、お料理番の大住与左、それから先きは同腹中の佐々孫助が豫ての魂胆……必ず大事ござりませぬ。何はともあれ、片時も早う。

小車局 それ聞いて安堵しました。そんなら此間に。

トゆきかける。

常磐木 アモシ、必ず共に

小車局 合点ぢやわいなア。

ト二人よろしくこなしあつて、小車は急ぎ縁側つたひに上手奥へ入る。常磐木独り残り

常磐木 どのやうな明君さまも、子ゆゑの間にはお目がかすむ。お姫様が絆となり、いざ落城の間際となつて、御

成敗の手が狂はゞ、耕した地面に醜ぬ草の、種を翻すも同然ゆゑ、其の禍ひの根を絶つため、事にさきだち千姫さまを、伴ひだしまゐらせよとの嚴命をうけ、夫の指

図に隨うて婢女に姿をやつし、邪推、疑ひ、依怙鼻、其の同士打を附け目にして、あの小車にまづ取り入り、まんまと奥に住みこみしも、数ふれば早や五月。万一こよひを過す時は、辛苦の萱も一日の煙り。どうぞ首尾ようお姫さまを、お伴したいものぢやな。

トこのうち上手別棟の妻戸を開きて、内より以前の小車、小脇に召換の包みを抱き、秀頼公の御台所千姫君の手を引き、わざと灯を持たず、縁づたひに闇中をさぐり／＼いで、やがて此方へ近づく。ト俄に足早に走りいづる。すぐ其の後より淀の方、薙刀を小わきに掻いこみ、同じく忍び足にて附けて出る。

小車局 常磐木どの。(ト常磐木、千姫に会釈しようとするを止めて) ア、コレ、お会釈は後に／＼。めさせかへます暇はない、植込かげで此の召物……

ト常磐木に包みを渡し

かういふうちも心がせく。人目にかゝらぬ其のうちにかういふと、千姫は名残をしげに見返り

千 姫 そんなら小車、また逢ふぞや。必ず無事で(トいひかけるを止めて)

小車局 アモシ、何にもおつしやりますな。常磐木どの、片時も早う。

常磐木 さア、かうおこし遊ばしませ。

淀 君

ト常磐木階段を上り、千姫君の手をとらうとする。此以前、淀の方此方に近づき、縁側の小簾かげに身をひそめて問答をきいてをり、此時つゝと出て

曲者ッ。

小車局

ト三人あなやと驚きふりかへる。小車、淀の方を見てヤ、あなたは……

トあわてゝ下手へ逃げようとしたが、忽ち懐刀を抜いて淀の方へ切つてかゝる。淀の方薙刀にてあしらひ、二三合あつて見事に小車を斬り倒す。小車すぐに息たゆる。

常磐木も不意に驚き二足三足階下へあとずつて、急ぎ合羽をぬがうとしてぬげぬ思入、こなし。同時に千姫が怖れて階段を駆け降りんとするを、淀の方すかさず薙刀の柄にて遮り

淀 君

曲者が入つたるぞ。出あひませい／＼。

此うち常磐木は懐刀をぬぎ、淀の方にかゝる。ト淀の方千姫を上手へ薙刀にて追ひのけ、一寸立廻る。此途端、奥及び下手より饗庭の局、梶の葉の局、其他女中大勢、駆けいで、饗庭の局はすぐに割つて入り、手早く常磐木を階下へ突落す。梶の葉、其他助け、激しき立廻りにて常磐木は懐刀を打落され、遂に梶の葉の腕をねちあげられて、いましめられる。此以前千姫再び階段を駆けおりんとするを淀の方薙刀の柄にてしかと抑へる。

饗庭局

驚き入つたる意外の珍事。御前さまには、どこも



淀君 中村歌右衛門

千姫 中村松江

お怪我はござりませぬか。(ト千姫を見て) ヤ、あなたは
千姫君さま。

梶の葉 (も小車の死骸を見て) ヤ、こりやこれ、小車どの
の……

皆々 此の休は。

ト皆々驚く。千姫ふるへてゐる。此以前、腰元二人階下
に降り、梶の葉から常磐木を受取り、下手の庭木に繋
ぎ、番をしてゐる。淀の方は尚薙刀の柄にて千姫をおさ
へたまゝで、一同をジロリと見かへり、わざと始めは静

に

淀君 ヤイ皆の者、目を開いてよう見やれ。イヤサ、よ
う主の命まもり、よう用心してたもつたなう。斯うあ
らうと知つたるゆゑ、千姫どのに気を附けいと、吩咐け
たを鼻であしらひ「何の大事ござりませう、御台さまは
確と私しがあづかります」と口広う言うた饗庭をはじ
め、邪推ひがみと常日頃、後言を言ふ其方たちは、真に
甚い天眼通、テモ頼もしい。(ト千姫を手荒く上手奥へ突き
やりて薙刀を抛げいだし) 不埒者めが。

トきつく言つて、淀の方忿怒の思入。眼尻をつりあげ身
をふるはせつゝ、皆々を睨みまはして座につく。饗庭の
局は面目なげに手をつき

饗庭局 恐れ入りましたござりまする。何と申しわけ仕り

ませうやら、恐れ入りましてござりますれど、餘人は知らず小車に、かやうな野心がござりませうとは、夢さらいて存じませず……(トいひかける)。

淀 君 黙りや。口と心とは裏表、人の心は上に見ゆるものでないと、そちや今日となつてはじめて知つたか。イヤサ、そちや何歳ぢや。此大奥に奉公も、数ふればはや二十餘年、二十餘年の其のあひだ、恩をうけ、目をかけた、大恩ある主の零落に、ようも、只おのれらの身を思ひ、あの太閤に相違うち、忠義ごかしに千姫を、おめく、關東の陣所に送り、降参せい、と勧めたな。それを功におのれらの、命たすかり、あはよくば、榮利を凶る下心と、こちや夙に見ぬいてある。ア、誂めた、その手筈が狂うたゆゑ、わざと油断し隙を見せ、關東方のまはしものに、千姫どのを盗ますのぢやな。

饗庭局 物体ない、滅相な。何のマアそのやうな。最前申しあげましたは、恐れながら御助命の、其のおとりなしを御台さまに、お縋り遊ばし大御所さまに……(トいひかける)。

淀 君 黙れ。
饗庭局 ハ、。

淀 君 何ぢや、緋れ。緋れとは誰れに言ふ。ヤイ、みづからは右大臣秀頼が母ぢやぞよ。緋るとは、彼方が尊

く、此方が卑く、又は此方に非分があつて、慈悲憐愍を願ふの諭語ぢや。假令のたれ死しようとも、あの義理知らずの徳川に、何で緋つて頼まうぞ。太閤が今おはさば、あの古狸にこそ吠面かゝせ、乞食が物乞ふやうに、此方に緋らせて見せうものを。何で彼奴に緋らうぞい。よし緋らうとも、聴けばとて、彼奴らの言葉が頼みにならうか。現の証拠は太閤の(ト涙声になり)最期の、最期の依頼さへ……反古……同然……

トとぎれ／＼に、いひかけて淀の方嘯啼し、言葉がとぎれる。

饗庭局 恐れながら御前さま、そのやうに御意遊ばしまするは、御遠慮過ぎたお心遣ひ。最前も大藏卿が申せし通り、まこと徳川殿腹黒く、お家に仇をばなされしとも、虎狼さへ手向はぬ柔弱い者をば庇ふと聞く。ましてや御台さまは孫姫君、御台さまのお口づから、願はせられなば御助命の、お沙汰に御違約ござりませうや。只今の珍事につけ、察せられますは彼方さまの御心底。恩義を見するは今此時。時おくれては詮ないこと、何とぞ御賢慮遊ばされ、今夜のうちに御台さまをば……(トいはせも果てず)

淀 君 黙れ。大それた不埒不覚を、まづ詫びようとも致さいで……仔細らしい諫言ごかし……ア、きこえた、こ

りや何ぢやな、そぢや小車と同腹ぢやな。

饗庭局 まつたく以てさやうな心は……

淀 君 さうでなくば何故に、姫を今夜逃さずば、彼方の心が察せらるゝ、逃したいと何故言うた。イヤサ受けあうた千姫を、なぜ油断して盗ませましたぞ。

饗庭局 サ、その儀は。

淀 君 怪しい女をひきいれて、みづからに手向ひさせ、それでも不忠でないと申すか。

饗庭局 サ、それは。

淀 君 疑ひもなく其方は、大蔵、小車と心を合せ。当家危急となつたるゆゑ、恩を忘れ、利に迷ひ、徳川に内通なし、千姫を無事に落し、其れを功に命助かり……（トいひかける。）

饗庭局 エ、お情けない其の御疑念……（ト泣く。）

淀 君 イ、ヤ、さうぢや。さうぢや。道軒めが逐電も其の手筈を合はせう為ぢや。言ひわけあらば返答せいで。何とぢや。どうぢや。

ト淀の方のただかになつてきつといふ。饗庭こらへかねてハラ／＼と落涙し、さしうつむき黙つてゐる。梶の葉の局恐る／＼膝を進め

梶の葉 憚りながら申しあげます。餘人であらば存ぜぬこと、饗庭の局に限りましては、よもやさやうな不忠な

心は……

淀 君 ないとはいはさぬ、証拠は目前。若しみづからが目ざとく見つけ、あの曲者を成敗せずば、其方たちは何とするぞ。

梶の葉 サ、その儀は。

淀 君 怪しい女をひきいれて、手向ひさせたは誰が罪ぢや。

梶の葉 サ、それは。

淀 君 主の寢息を窺うて寢首を搔かうも知れぬ奴。ヤイ、饗庭、道軒も大蔵も、必定そちと同腹中であらうがの。返答せい。どうぢや。

ト淀の方柳眉を釣りあげ、顔色も蒼くなつて、睨みつめて詰問する。饗庭の局は此間さしうつむき、黙然と涙にくれてゐたが、此時面をあげて

饗庭局 おそれ入りましたござりまする。斯かるお疑ひを蒙りまする上は、半時生くれば半時の、御心労を加ふる道理。また存へても寸分の御奉公を尽す頼みも無し。御前を汚すは恐れ多うござりますれど、不忠不覚の申しわけ（トいひかけて、急に懐刀を取いだし）まッこの通り。

トすぐに抜いて自害しようとする。梶の葉驚き止める。

此以前より上手の小簾かげにて様子を聞いてゐた正栄尼（六十七八）縁側づたひにかけ入り、懐刀を持つ手をお

さへて

正栄尼 コレ、血迷うてか、饗庭の局……マ、こゝをおはなしなされ。……如何なる折と心得らるゝぞ。命一つを棄つればとて、何事の申しわけにもなりませぬぞ。

饗庭局 ぢやと申して、此まゝには……

正栄尼 ハテマア、お離しなされといふに。

ト懐刀をもぎとる。饗庭面目なげにうつむく。正栄尼は恭々しく膝をすゝめて

正栄尼 恐れながら、御前さまへ申しあげ奉ります。誠にはや、御前さまの御賢察に露ばかりもたがひませず、果してかやうな大珍事、図らずも出来なし、何とお詫びの申しあげやうもござりませぬ。とはいへ、かゝる仕儀に及びましたは、畢竟私共一同の不束、誰れ彼れ一兩人の懈怠不所存でもござりませねば、何卒もちまして此尼に免ぜさせられまして、恐れながら饗庭が御不興、御有免の下されまますやう（トいひかけて、後を見返り）梶の葉どの、それ／＼、皆も一しよに。……

これにて梶の葉はじめ腰元らまで膝を進めて

梶の葉 何卒もちまして、饗庭の不埒を、御有免下されまするやう……

腰 元 私ども共々に……

皆 お願ひ申しあげます。

ト此以前、淀の方は、正栄尼の言ふ事を善くは聞いてゐぬ思入にて、折々千姫の方を凄目をして睨みつけてをり、此口上が終ると、ふいと立つて階段近くまで歩み出で、階下にいましめられてゐる常磐木に目をつけ、急に

正栄尼を見かへり

淀 君 正栄尼。

正栄尼 ハ、。

淀 君 あの者は曾ぞ見ぬ婢女、廻し者に相違ない。引

きいだして糺問せい。

正栄尼 ハ、。

ト正栄尼は不意の命に聊かうろたへた思入、やがて腰元に指図して、階段の間近へ常磐木をひきすゑさせる。

正栄尼 才、此者は、此春このかた御奉公せし婢女。

淀 君 面を上げさせい。

正栄尼 ハ、……ヤイ女、面を上げませい。

常磐木 （しづかに）面を上げますまでもござりませぬ。

関東の内意を受け、大胆にも入り込みしが、事敗れし上からは、とうに覚悟は極めし此の身。サアすつぱりと御成敗遊ばしませい。

淀 君 ヤアその覚悟顔が憎い。同類があまたあらう。言はずば苛責して白状させい。

常磐木 （冷然とおちつきて）その苛責は詮ないこと。同類は